

第三章 性の科学

この最初の二つの点については、私の意見は認められるだろうと思う。すなわち、性についての言説は、三世紀この方、減少させられるよりは増大させられてきたこと、そしてまた、性についての言説が、タブーや法律上の禁止を伴っていたとしても、それはより根本的な形で、散乱する性的異形性をことごとく確実なものとし、定着させたのだと認めることに、人は同意してくれるものと思う。それにもかかわらず、このようなすべての事は、本質的には防禦の役割しか果たさなかつたように見える。性についてかくも多くを語り、細分化され、仕切られ、特殊化された性を、人々がどのように性をはめ込んだ他ならぬその場所に発見するというのは、実は、性を偽りの姿の下に隠蔽しようと企てているのではないか。遮蔽幕としての言説であり、分散即回避というわけである。とにかくフロイトに至るまでは、性についての言説は——学者や理論家の言説は——それが語っているものを、言葉の下に隠すことに終始してきたかのようなのである。語られたこれらすべてのこと、細心の予防措置や詳細な分析も含めて、性についての耐えがたい、余りにも危険な真理を巧みにかわすための手続きだとも取ることができよう。いかにも、人々が、それに

については、科学という純化された中立的な観点から語っているつもりでいたという事実は、それだけで、それ自体において、意味するところ明瞭である。事実それは、かわすことによって成り立っている科学であった。性そのものについては語る事ができないか、あるいは語ることを拒否していたため、この科学が好んで対象としたものは、自分が異常と見なすもの、すなわち性倒錯、例外的な変形、病理学的異常、病的な悪化であったからである。それは同様に、本質的には道徳律の命令に従属した科学であり、道徳律の分割思考を、医学的な規範という形でむしかえしていた。真実を語るといふ口実のもとに、それは至るところで恐怖を掻き立てていた。性的欲望にほんの僅かな変動を認めるや、それこそ、幾世代にもわたって悪影響をもたらす様々な悪が支配権を振るっているに違いないと想像した。それは、気の弱い人間の目を避けた習慣や、およそ孤立した取るに足らぬ偏執をも、社会全体にとって危険極まるものであると断言した。異形な快楽の行き着く先としてそれが設定したものは死であった。個人の死、幾世代にも及ぶ死、種族全体の死なのであった。

この科学はこうして、執拗かつ不遠慮な医学的実践に結びついていたが、この医学的実践は、己れの嫌悪を声高く主張するのに言葉を惜しまず、法律と世論の助けを借りるのにいささかの躊躇も見せず、また、真実の要請に対して従順であるよりは、秩序を好む権力者に対して隷属的であった。最良の場合でもそれと自覚せずに愚直であり、多くの場合は、意識的に虚偽を語るこの科学、自らが告発している事柄の共犯者であり、傲慢不遜でいながらしかもさわり魔であるこの科学は、十九世紀末の特徴をなす、病的なるものをめぐるいかがわしい言葉をことごとく創始し

たのである。フランスにおいては、ガルニエ、プイエ、ラドゥセットの如き医師たちが、その栄光なき公式の書き手であり、ロリナがその恭々しい歌い手であった⁽¹⁾。しかしながら、この科学は、このようないかがわしい快楽を越えて、別の権力を要求していたのである。それは、自らが衛生上の要請の至高の裁決機関であると主張したのであり、性病に対する古来の恐怖にあわせて消毒殺菌という新しいテーマを取り上げ、人類は進化するという大いなる神話に結びつけて、公衆衛生という近年の制度を持ち出したのだ。その言うところによれば、この科学は、社会体〔社会の構成員全体〕の肉体的壮健と精神的清潔を保証する使命を担っているのであり、欠陥の持ち主、変質者、墮落した住民を除去することを約束していたのである。生物学上ならびに歴史上の緊急な要請の名のもとに、それは、当時出現は必至であった国家的レベルでの人種差別を正当化した。それを「真理」としてうち立てたのである。

人間の性行動（セクシュアル）に関するこれらの言説を、同時代における動植物の生殖に関する生理学の現状と比べて見る時、人はその差異に驚かされる。それが、科学性においてなどと言う気はないが、ごく単純に基本的な合理性においてさえ極めて薄弱なものであったという事実は、知識の歴史の上で、これらの言説を全く特殊なものに仕立てている。それは奇妙に混乱した一つの領域を構成しているのである。性は、十九世紀を通じて、はつきりと違う二つの知の分野に登録されているように思われる。すなわち、生殖の生物学という、科学一般の規範性に従って継続的に発展した分野と、性医学という、全く別の構成原理に従って成立した分野とである。一方から他方への真の交換は全く見られなかったし、相互に構造化に寄与するということもなかった。前者は後者に対

して、非常に隔たった、しかも虚構の保証人という役割しか果していなかった。それは一括した保証であって、その覆いのもとで、道徳的障害も、経済的乃至政治的選択も、古来からの恐怖も、科学的な響きをもつ語彙によって書き直されることが出来るわけであった。あたかも人間の性ならびに、それと相関関係にある様々な現象やその作用については、理性的な形の言説が語られることに對する根本的な抵抗がある、とでも言った具合である。このような水準の不均衡は、この種の言説において問題になっていたのが真理を語ることではなく、真理が作り出されるのを妨げることには他ならなかったという事実の徴候であるかも知れぬ。生殖生理学と性行動の医学との間にあるこの差異の下には、単なる科学的進歩の不揃いや、合理性の形式における水準の差とは違う何かを、いやそれ以上のものを讀まねばなるまい。一方は、西洋世界における科学的言説の確立を支えてきたあの巨大な「知」への意志に属するであろうが、それに対して他方は、（非）知への執拗な一つの意志に属するものだとも言えそうだからである。

否定しようのないことだが、十九世紀に性についてなされた学問的言説は、古くからの信じやすさと、同時にまた、徹底的な盲目状態に貫かれている。見、聞くことの拒否である。しかしながら——そしてこれが恐らく最も本質的な点なのだが——その拒否の対象となるものは、人が立ち現われさせ、あるいはそれに明確な表現を与えることを緊急に求めているその当の事柄に他ならないのである。というのも、認知の拒否があり得るのは、真理へのある根本的な関係を背景にしているのだから。真理をかわし、その通路をふさぎ、それを偽りの外見のもとに隠蔽する、これらはいずれも、それぞれの場所に適した戦術であり、丁度オーバーラップのように、しかも

最後の決定機関における逃げ道としてやって来て、知の本質的請願に逆説的な形を与えるのである。認知しようとしないうのも、これもまた、真理への意志の一面なのである。シャルコ（2）のサルペトリエール精神病院が、ここではよい例となるだろう。それは独特の検査、訊問、実験を伴う巨大な観察機関であったが、同時にそれは、煽動の仕掛けの総体でもあって、それに伴うのは、公開臨床であり、エーテルやアミル硝酸塩によって細心に準備されて儀式のように繰り返される発作という演劇であり、対話や触診、患者の上に置く手、医師達が仕草や言葉で呼びまましたり消滅させたりする患者の姿態といったものからなるゲーム（3）かけ引きであり、また、窺い、組織化し、惹起し、記録し、報告し、観察報告とカルテの巨大なピラミッドを築き上げる職員の階層組織なのである。ところで、まさにこのような言説ならびに真理への絶えざる煽動というものを背景にして、認知拒否の固有のメカニズムが働き始めるのである。たとえばシャルコが、余りにも露骨に「あれ」が問題になり出すや、公開臨床の診察を中止する時のあの仕草である。それはまた、より多くの場合には、性に関して患者が語り、見せたもの——しかもそれは医師自身が呼び掛け、呼び出したものに他ならないが——それがカルテの途中で次第に消し去られていき、公表された観察資料の段階ではほとんど完全に消去されているというあの操作である。（3）この話のなかで重要なのは、人々が目を覆ったのでも耳をふさいだのでもなく、また思い違いをしたということでもない。重要なのは、まず第一に、人々が性の罫りに、そして性について、真理を産出する巨大な仕掛けを——勿論、最後のところでその真理を隠蔽するにしても——作り上げたということである。重要なのは、性が単に感覚と快楽の、法や禁止の問題ではなく、真と偽の間

題であり、性の真理が、有用であれ危険であれ、貴重なものであれ恐るべきものであれ、とにかく本質的な何物かになってしまったということであり、要するに、性が真理の賭金として成立させられるに至った、ということなのである。従って、この際はつきり捉えかえしておかねばならないのは、フロイトにせよ誰にせよ、誰かが画期的に発見した新しい合理性というものがそこから始まる闕ではなくて、十九世紀が我々に遺贈し、かつまた、我々がそれを修正したとしてもまだそこから脱却したとは何物も保証してくれないところの、この「真理と性の戯れ」の漸進的な形成（ならびにその変形）というものである。認知の拒否、逃げ、回避が可能であり、効力を發揮できたのは、ただ、性の真理を語るというこの奇妙な企てを背景にすることによってのみであった。十九世紀に至って「科学」になろうとする企図がそれに特異な形を与えたことは事実だとしても、この企ては十九世紀に生まれたものではない。それは、性に関する知があればほど長い間さ迷っていたように見える、あのいやらしく、愚直で、しかも狡猾なすべての言説の土台に他ならないのである。

*

歴史上、性の真理を生み出すためには、二つの大きな手続きがある。

一方には、**性愛の術**を備えた社会があり、しかも、中国、日本、インド、ローマ、回教圏アラブ社会など、その数は多かった。性愛の術においては、真理は、人が実践として知り、経験として取り集めた**快楽**そのものから引き出される。快楽が問題にされるのは、許可と禁止の絶対的掟

との関係においてではないし、実用性の基準に基づくものでもない。そこでは快楽は、第一に、そして何よりもまず、快楽自体との関係において、快楽として識られるべきものであり、従って、その強度、その特別な質、その持続、肉体と魂とにおけるその反映に従って識られるべきものである。そればかりではない。この知は、性の実践をあたかも内側から育てるようになって、その効果を増大させるために、節度を以て性の実践そのものへと再び注入されなければならぬ。こうして、秘密として留まるべき一つの知が成立するが、それが秘せられねばならぬのは、その対象が汚らしいものだと見なされることを恐れるからではいささかもなく、伝統的に、その知は、口外されればその効能と力を失うと考えられているが故に、最も慎重に隠しておく必要があるからである。秘密を保有している師への関係は、従って、この知の根本をなす。師だけが、この知を、秘教特有の直接的な形で、しかも、彼が弟子の歩みを隙のない知と厳格さで導いてやる秘儀伝授の儀式の果てに、伝えることができるのだ。師によって与えられるこの術の効能は、その具体的な秘法の無味乾燥から予想されるよりも遙かに豊かなものであり、この術が特権を許し与えた者を変容させるはずのものである。すなわち、肉体の完全な統御、快楽の類い稀な享受、時間と限界の忘却、不老不死の靈薬、死とその脅威の追放がそれである。

我々の文明は、少なくとも一見したところでは、**性愛の術**を所有してはいない。そのかわりに、**性の科学**を実践している恐らく唯一の文明であろう。といつかむしろ、その独自性は、幾世紀にもわたって、性の真理を語るために展開させてきた社会的手続きが、秘儀伝授の術や師の与える秘法とは厳密に正反対の、〈知である権力〉という形へと本質的には整えられてきたとい

うことだ。そこで問題になるのが、告白なのである。

少なくとも中世以来、西洋社会は、告白というものを、そこから真理の産出が期待されている主要な儀式の一つに組み入れていた。一二一五年のラテラーノ公会議による悔悛の秘蹟の規則化、それに続く告解の技術の発展、刑事裁判の手続きにおける告訴に重点を置く方式の後退、有罪性の試煉（誓言、決闘、神明審判）の消滅と訊問ならびに調査の方法の発展、犯罪の追及において国王の行政府の占める役割の増大——しかもそれは私人間の調停という方策を犠牲にして実現された——、異端審問裁判所の設置、これらすべては、世俗的ならびに宗教的権力の次元において、告白に中心的な役割を与えることに貢献してきた。そもそも、「告白 (aveu)」という語ならびにこの語が指し示してきた法律的機能の変遷は、それ自体において特徴的である。他者によってある人間に与えられる、身分、本性、価値の保証としての「告白」〔たえ〕から、ある人間による、自分自身の行為と思考の認知としての「告白」〔白〕へと移ったのである。個人としての人間は、長いこと、他の人間たちに基準を求め、また他者との絆を顕示することで（家族、忠誠、庇護などの関係がそれだが）、自己の存在を確認してきた。ところが、彼が自分自身について語り得るかあるいは語ることを余儀なくされている真実の言説によって、他人が彼を認証することとなった。真実の告白は、権力による個人の形成という社会的手続きの核心に登場してきたのである。いずれにせよ、試煉の儀式の傍らで、伝統のもつ権威によって与えられる保証というものの傍で、証言の傍で、いやそればかりではなく、観察と立証の学問的方法の傍で、告白は、西洋世界においては、真理を産み出すための技術のうち、最も高く評価されるものとなっていた。それ以

来、我々の社会は、異常なほど告白を好む社会となったのである。告白はその作用を遙か遠くまで広めることになった。裁判において、医学において、教育において、家族関係において、愛の関係において、最も日常的次元から最も厳かな儀式に至るまでである。自分の犯した犯罪を告白する。宗教上の罪を告白する。自分の考えと欲望を告白する。自分の過去と自分の夢を告白する。自分の幼児期を告白する。自分の病いと悲惨を告白する。人は懸命に、できる限り厳密に、最も語るのが難しいことを語ろうと努める。公の場で、私の場で、両親に、教師に、医師に、愛する者たちに告白する。人は、他の人間では不可能な告白を、快樂と苦しみのみなかで、自分自身に向かつてし、それを書物にする。人は告白する——というか、告白するように強いられているのだ。告白が自発的でないか、あるいは何らかの内的要請によって強制されていない場合には、告白は奪い取られる。人は告白を魂のなから狩り出し、肉体から奪い去る。中世以来、拷問は告白には影のようにつきまとい、告白が力を失いそうになると、それを支えてやる。両者は黒い双子なのである。最も優しい愛情がそうであるように、権力の最も血腥いものも、告白を必要としている。西洋世界における人間は、告白の獣となった。

そこから多分、文学における変容も由来する。かつては、勇氣や聖性の「試煉」をめぐる英雄的な、あるいは神秘的な物語に集中していた、語り・聞くという快樂から、告白という形式そのものが手の届かぬものとしてちらつかせている真実を、自己の深奥から、言葉の間に、立ち昇らせるという際限のない努力を使命とする一つの文学へと、人は移行したのである。そこからは、あのもう一つの哲学する方法というものも生まれてきた。真なるものへの根本的な関係を、単に

自分自身において——何かしら忘れられている知、あるいはある種の生まれつき持つ痕跡のなか——求めるのではなく、移ろいややすい数多の印象を通じて意識の根本的な確実性を解き放つてくれる、自己の検討というもののなかに求めるのである。告白の義務は、今や我々に、余りにも多くの相異なつた地点から送られてくるし、それが我々にとって、今や余りにも深く我々の肉体のなかに根をおろしているのだ。我々はもはやそれを、我々を強要する権力の作用などとは知覚していない程なのだ。反対に我々には、真理は、我々の最も秘密な場所で、ただ白日のもとに立ち現われることのみを「要求して」いるかに思っている。そしてもし真理が白日のもとに立ち現われることができないでいるなら、それは何らかの束縛・抑制がそれを捉えているからであり、権力の暴力がその上にのしかかっているからに他ならず、真理は一種の解放によってしか、ついに自らを語るることができないであろう、と。告白は解放であり、権力は沈黙を強いるとか、真理は権力の領分には属さず、本来的に自由と近親性を持つているとか、こういった哲学上の伝統的命題のごとくを、「真理の政治史」は逆転させねばなるまい。真理が本来的に自由なのでも、誤謬が隷属状態であるのでもなく、真理の産出にはことごとく、権力の関係が貫いているということを示すことによつてである。告白はその一つの例なのだ。

告白のこのような内在的畏に余程自分自身が引つかかっているのではない限り、検閲や、語ることを考えることの禁止に、根本的な役割を与えることはできない。権力についての全く転倒したイメージを抱かない限りは、我々の文明においてあれほど久しい以前から、自分が何者であるのか、自分が何をしたのか、自分が何を覚えているのか、何を忘れたのか、隠しているもの、隠れ

ているもの、考えも及ばないもの、考えなかつたと考えるもの、こういふすべてが何かを語れという途方もない要請を執拗に繰り返すあらゆる声が、我々に自由を語っているなどとは考えられないはずだ。西洋世界が幾世代もの人間をそれに従事させた、産出するための龐大な工事であり——その間に、他の形の作業が資本の蓄積を保証していたわけだが——そこに産み出されたのは、人間の《assujettissement》〔服従＝主体一化〕に他ならなかつた。人間を、語の二重の意味において《sujet》〔臣下＝服従した者と主体〕として成立させるといふ意味においてである。想像してみなければならぬのは、十三世紀初頭に、すべてのキリスト教徒に対して、少なくとも一年に一回は跪いて、自分の犯した過ちのことごとくを、一つも見落すことなく、一つ一つ告解しなければならぬという命令が、どれほど途方もない要求に思えたかということである。そして今度は、七世紀後に、山奥で、セルビアの抵抗運動に加わりに出て来た身許不明のバルチザンの話を考えてみるがよい。彼の上官たちは、彼に、その生活を書けと要求する。そして彼が夜のうちに書きなぐつた何枚かの哀れな紙片を持つてくると、彼らはそれを見もせず、ただこう言うのである、「やり直し、眞実を言え」と。人々があれほどの重みを与えているかの名高い言語上の様々なタブーにしても、それがあるからといって、千年来続いてきた告白というこの桎梏を忘れてよいということにはなるまい。

ところで、キリスト教の悔悛・告解から今日に至るまで、性は告白の特権的な題材であつた。それは、人が隠すもの、と言われている。ところが、もし万が一、それが反対に、全く特別な仕方て人が告白するものであるとしたら？ それを隠さねばならぬという義務が、ひよつとして、

それを告白しなければならぬという義務のもう一つの様相としたなら？（告白がより重大であり、より厳密な儀式を要求し、より決定的な効果を約束するものとなればなるほど、いよいよ巧妙に、より細心の注意を払って、それを秘密にしておくことになる。）もし性が、我々の社会においては、今やすでに幾世紀にもわたって、告白の完璧な支配体制のもとに置かれているものであるとしたなら？すでに述べた性の言説化と、多様な性的異形性の分散と強化とは、恐らく同じ一つの装置＝仕組みの二つの部品なのである。それらは、人々に性的な異形性の——それがどれほど極端なものであっても——真実なる言表を強要する告白という中心的な要素のお蔭で、この装置のなかに有機的に連結されているのである。ギリシャにおいて、真理と性が結びついていたのは、教育という形で、貴重な知を身体からだから身体からだへと伝承することによってであった。性は知識の伝授を支える役割を果していたのである。我々にとっては、真理と性が結びついているのは、告白においてであり、個人の秘密の義務的かつ徹底的な表現によってである。しかし今度は、真理の方が、性と性の発現とを支える役を果している。

ところで、告白とは、語る主体と語られる文の主語とが合致する言説の儀式である。それはまた、権力の関係において展開される儀式でもある。というのも、人は、少なくとも潜在的にそこに相手がいないければ、告白はしないものであり、その相手とは、単に問いかけ聴き取る者であるだけではなく、告白を要請し、強要し、評価すると同時に、裁き、罰し、許し、慰め、和解させるために介入してくる裁決機関なのである。それはまた、真理が、自らを言葉によって表明するために取り除かなければならなかった障害と抵抗とによって、自らを真理として認証する儀式で

ある。そして最後に、そこでは、口に出して言うことだけで、それを言語化した者においては、それが招く外的結果とは関係なく、内在的な変化が生じるような儀式である。口に出して言うってしまうことが、その人間を無実にし、その罪を贖い、彼を純化し、その過ちの重荷をおろし、解放し、救済を約束するのである。幾世紀の間、性の真理は、少なくとも本質的な部分においては、このように自ら言葉で表わすという言説的な形態において捉えられていた。それは、教育という形においてはなかったし（性教育は一般的な原則と慎重さの規則に限定されることになる）、秘儀伝授という形においてもなかった（これは大体において無言の行為のままであり、童貞を失わせるか処女を奪うかによって、このイニシエーションは滑稽にもなり、暴力的にもなるのである）。それは、すでに明らかのように、「性愛の術」を律している形態からは最も遠ざかった形態である。それに内在する権力構造によって、告白の言説は、性愛フェリス・エロチカの術における如く上から、師の至上の意志によって訪れてくることはあり得ず、ただ下から、要請され強制された言葉として、何らかの絶対的な強制によって慎みと忘却の封印を爆破させて出現するのだ。それが秘密だと想定するものは、それが言わねばならぬ事柄の高い価値とも、それから利益を得るに値する人々の限られた数とも関係はない。それが結びつけられているのは、薄暗く曖昧な親しさとして、その一般的な低劣さとしてである。その真理は、偉大な師の人寄せつけぬ権威によっても、また、彼が伝授する伝統によっても保証されてはいず、ただ言説のなかで、語る者と語られている事との間の絆、本質的帰属関係によって保証されているのだ。反対に、支配の機関は、語る者の側にはなく（というのも彼は束縛されているのだから）、聴き、かつ黙っている者の側にある。

知っていて答えをする者の側ではなく、問い、しかも知っていると見做されていない者の側にある。しかも、この真理の言説が効力を発揮するのは、それを受け取る者においてではなく、それが奪い取られる者においてなのだ。我々は、このような告白された真理によって、賢者による快楽の秘儀伝授と、その技術、その神秘体験とから、最も隔たったところにいる。我々が属しているのは、その代わりに、秘密・秘法の伝承においてではなく、徐々に勢を増す打ち明け話の周囲に、性についての困難な知を組織してきた社会なのである。

*

告白は、性に関する真理の言説の産出を律している最も広く適用される母型であったし、現在でもそれは変わらない。しかしながら、それは、かなり重要な変形を蒙ってきている。長いこと告白は、悔悛の実践のなかに固く組み込まれていた。しかし、次第次第に、プロテスタンチズムや反宗教改革、十八世紀の教育学や十九世紀の医学が現われるにつれて、その都度、教会の儀式の場だけに限定されるという特性を失ってきた。告白は広がったのである。人々は告白を、一連のあらゆる関係のなかで用いた。子供と親、生徒と教育者、患者と精神病医、犯人と鑑識人の間でである。人々が告白に期待する動機や効果も多様化したし、同様に、告白のとり方も、訊問、診察、自伝的記録、手紙、と多様になった。それらは委託され、書き写され、資料としてまとめられ、刊行され、解説された。しかし特に重要なのは、告白が、他の領域に開かれたわけではなく、少なくとも、他の領域を動きまわる新しい方法を手に入れたということだ。もはや問題に

なるのは、単に何がなされたか——つまり性行為 (l'acte sexuel) ——を、そしてそれが如何になされたかを語ることでだけではない。そうではなくて、性行為において、性行為の周囲に、それを裏打ちしている思考、それに伴う偏執、それにつきまとう快楽の影像や欲望、快楽の転調の波やその質を、再構成することなのである。恐らくこうして、初めて、一つの社会が、個人の快楽の打ち明け話そのものを懇請し、それを聞くために、身を乗り出すことになったのだ。

つまり、告白の社会的手続きの分散であり、その強制の働く地点の多様化であり、その領域の拡大である。こうして、次第次第に、性の快楽の巨大な集蔵庫アルシヴが作られてきた。この集蔵庫は、作られるに依りて消滅するという時代が長く続いた。それは痕跡なしに通過していったが（それがキリスト教の告解の要請であった）、やがて、医学と精神病理学と、更には教育学までもが、それを定着させ始めた。カンペ、ザルツマン、そして特にカーン、クラフト＝エービング、タルディユー、モレ、ハヴロック・エリス(5)が、異形な性の多様な発現を歌うこの貧しい心情吐露の文学をことごとく、細心に取り集めたのである。こうして西洋社会は、自分たちの快楽について際限のない記録をつけ始めた。その標本図鑑を確立し、その分類を定めた。日常のありふれた欠陥を、異常として、あるいは症状の悪化として描写した。まさに重要な時点であった。十九世紀の精神病医たちが、彼らが語らせなければならぬおぞましい事象について、大袈裟な調子で言い訳をし、「良俗壊乱」であるとか「生殖感覚のおぞましい異常」とかを語るのを見て、それを笑うのは易いことだ。私としては、むしろ彼らの大真面目な態度に敬意を表したいと思っている。彼らにはこれが一大事件である事が直観的に分かっていたのだ。それはまさに、最も奇怪な快楽

が喚問されて、自分自身について真理の言説を語らせられた時であり、しかもその言説は、宗教上の罪や救済、死や永遠について語る言説に連結されるのではなく、肉体と生命を語る言説、すなわち科学の言説に連結させられたのである。まさに言葉を震えさせるだけのことはあったのである。この時、あの起るとは思えなかったことが成立したのだ。すなわち〈告白という科学〉であり、それは告白の様々な規則的実践と告白の内容に支えを見出だす科学、このような多様なつ執拗な強奪を前提とし、〈告白されたものである告白され得ざるもの〉を己れの対象とする科学なのである。十九世紀にあれば高度に制度化されていた科学的言説にしてみれば、このように下の方にある言説をことごとく引き受けなければならなくなつたとき、烈しい屈辱と嫌悪の情を感じたし、少なくとも烈しい反撥を以てそれに対した。それはまた、理論上も、方法の点でも一つの逆説であつた。主体についての学を成立させる可能性に関する長い議論、内省の有効性、体験の明白さ、あるいは意識の己れ自身への現前といった議論は、おそらく我々の社会における真理の諸言説の機能に内在するこの問題に呼応していた。すなわち告白という古い法律的・宗教的モデルに従う真理の産出と、科学的言説の規則にのつとつた打ち明け話の強奪とを関係づけることができるだろうか。性に関する真理は、十九世紀には、恐るべき閉塞・遮断のメカニズムと、言説の中核の欠落によつて、かつてないほど厳密に消去されていたと信ずる人々には言わせておこう。欠落などというものではない。過重であり重複であり、充分に言説がないというよりはむしろあり過ぎるのであり、いずれにせよ、真なるものを産出する二つの様式、すなわち告白という社会的手続きと科学的言説性との間の相互干渉なのである。

つまり、十九世紀に性に関する真理の言説を満たしていた誤謬や馬鹿氣た素朴さや道学者的論議をあげつらう代わりに、近代西洋を特徴づけている、この性をめぐつての知への意志が、告白の儀式的規則を科学的規則性の図式のなかで機能させたその手法というものを、はつきりと時間的に位置づけて捉える方がましだと思われる。長い伝統をもつ広大な強奪であるこの性の告白の強奪を、どのようにして、科学的形態のなかに成立させるに至つたのであるかを。

(一) 「語る(こと)」の臨床医学的コード化によつて。告白を検証と結びつけ、自己の物語を読解し得る表徴シニエならびに徴候の展開と結びつけること。訊問、細かい質問集、追憶・喚起を伴う催眠、自由な観念連合、といったあらゆる手段が、告白の手続きを、適当と見なされる観察の場に改めて登録するために、動員される。

(二) すべてに適用可能で、しかも拡散した因果関係を、公準として立てることによつて。すべてを語らねばならず、すべてについて訊問することができるといふ考えは、性が無尽蔵かつ多形的な〈原因となる力〉を担っているという原則にその正当化を見出だすだろう。性行動における最も目につかぬ出来事が——突発事であれ逸脱であれ、欠如であれ過剰であれ——その人間の生きてある間中、極めて多様な結果を招来し得ると想定されている。病氣や肉体的機能障害で、十九世紀が少なくともその病因の一部は性的なものに由来すると想像しなかつたようなものはほとんどない。少年たちの悪習から壮年の肺病まで、老人の卒中やあるいは神経障害、更には種族の

退化に至るまで、当時の医学は、一連の性的因果関係の網の目を張りめぐらしたのである。現在ではそれは、ひどく途方もないものに見えるかも知れない。性が「すべての、そして何であつてもあらゆることの原因」であるという原則は、一つの技術的要請の理論的裏面に他ならない。すなわち、完全かつ詳細を極めた不断の告白という社会的手続きを、科学的な形の実践において機能させることである。性のはらんでゐる無制限な危険が、性に課せられた訊問の徹底的な性格を正当化してゐるのである。

(三) 性現象には本質的に潜在性という特性が内在しているという原理によつて。性の眞実＝眞理を告白の技術によつて強奪しなければならぬのは、単にそれを語るのが難しかったり、それが慎みのタブーによつて禁じられてゐるからではない。そうではなくて、性の機能自体がよく分からないからだ。性が本性上、認識の網を逃れ去るものであり、そのエネルギーもその機能上の仕組みも、捉え難いからだ。原因として働くその力が、部分的には秘密のものだからである。性を科学的言説の企てに組み込むことによつて、十九世紀は告白の対象をずらした。その傾向として、告白はもはや単に主体が隠そうと思つてゐることを対象にするのではなくなる。そうではなくて、彼自身にも隠されており、少しづつ、しかも問う側と問われる側が共に参加する告白の作業によつてしか光のなかに立ち現われては来ないようなものを、対象とするようになったのだ。性現象に本質的である潜在性という原理によつて、困難な告白の蒙るべき強制を、科学的実践へと有機的に連結することが可能になつてゐる。告白はまさに力づくでも強奪しなければならぬ、何故

ならあはれは隠れてゐるからである。

(四) 解釈という方法によつて。告白しなければならぬのは、単に、告白の相手が、赦し、慰め、導く力を持つてゐると想定されるからではない。眞理産出の作業は、もし人がそれを科学的に有効なものにしようとするなら、まさにこの関係を通過しなければならぬからだ。眞理は、告白することによつて、眞理をすでに完成したものとして光のなかへともたらず主体というもののみに存してゐるのではない。それは言わば「複式」で〔簿記的〕構成される。眞理は、語る者においては確かに現前してはゐるが不完全であり、自分自身に対して盲目であつて、それが完成し得るのは、ただそれを受け取る者においてのみである。この後者こそ、この不可解な眞理のまさに眞理を語る者なのだ。つまり、告白によつて啓示されたものを、語られた事柄の解説によつて裏打ちしてやらなければならぬ。聴く側は、単に赦しの権限を握る師、断罪し、あるいは無罪とする裁き手ではなくなる。彼は眞理を握る主人となるだろう。彼の機能は解釈学的なのだ。告白に対して、彼の権能は、単に告白がなされる前にそれを強要したり、口に出して語られた後で、裁決を下すことだけではない。告白を通じて、そして告白の隠れた意味を解説することによつて、眞理の言説を構成することなのである。もはや告白を一つの証拠シグナではなく一つの表徴シンボルに仕立て、性現象を解釈すべき何物かに仕立てることによつて、十九世紀は、告白に基づく社会的手続きを、規則どおりに科学的言説を形成する作業のなかで機能させるという可能性を、自らに与えたことになるのだ。

(五) 告白の効果を医学的レベルに組み込むことによって。告白の獲得とその効果＝作用は、治療的操作の形において意味的に再編成される。それはまず第一に、性の領域が、もはや単に過失と罪、過剰と侵犯といった項目別記録ではなく、正常なものと病理学的なものとの区別に基づく管理体制（もつともそれは前者の置き換えに過ぎないが）の下に置かれることになる、ということとを意味する。こうして初めて、人々は、性的なるもの (le sexuel) に固有の病態を定着する。性は病理学的に高度に脆弱な場として立ち現われる。すなわち、他の疾病を反射する表面であるが、同時に固有の疾病学の中心でもあって、それは本能、性向、心的影像、快楽、行動に関する疾病学なのである。このことはまた、告白が医学の介入に囲まれることでその意味とその必然性を持つてであろうことを意味する。医師によって強要され、診断上必要であり、それ自体で、治療に際して効果的なのだから。真実は、それが然るべき時に、然るべき人に向かって、その所有者であると同時にその責任者でもある者によって語られれば、病いを癒すものなのである。

歴史的に長い尺度をとろう。我々の社会は、^{アルス・エロチカ}〈性愛の術〉の伝統と絶縁して、一つの^{スキエンチフィク}〈性的科学〉を自らに与えた。より正確に言えば、それは性についての真理の言説を産出するという務めを遂行してきたのだが、ただし、それは、告白という古い社会的手続きを科学的言説の規則に合わせることによってであったし、そこには決して困難が伴わなかったわけではない。〈性的科学〉は、十九世紀以来発展を見たものであるが、逆説的なことには、義務的にかつ細大洩らさ

ぬ告白という特異な儀式を、その中核として保有していたのであり、これこそキリスト教西洋世界においては、性についての真理を産出する最初の技術だったのである。この儀式は、十六世紀以来、次第次第に悔悛の秘蹟から切り離され、魂の導きと良心の教導——^{アルス・アルティマ}すべての術のなかの術〔^{至高}の術〕である——を介して教育へと、大人と子供の関係へと、家族関係へと、医学と精神病理学へと移住したのである。いずれにせよ、百五十年近く前から、性についての真理の言説を産出するために複雑な装置が設定されている。歴史を大きく股にかけた装置であり、何故ならそれは、告白という古い要請を臨床的な聴取の方法へと接続しているからだ。そして、まさにこの装置を通じて、性とその快楽に関する真理として、「性的欲望」(sexualité) と称されるような何物かが出現し得たのである。

「性的欲望」とは、性の科学という、時間をかけて発展させられたあの言説の実践と相関関係にある概念の名に他ならぬ。この性的欲望というものの、その根本的な性格は、程度の差はあれイデオロギーによって混乱させられているある一つの表象＝表現を翻訳しているのでもなく、あるいはまた、タブーによって生ぜしめられた誤認を翻訳しているのでもない。己が真理を産出しなければならぬ言説の機能上の要請に照応しているのだ。告白の技術と科学的言説性の要求との交叉する点で、この両者の間に何らかの大きな適合のメカニズム（聴取の技術、因果関係の公準、潜在性の原理、解釈の規則、医学への組み込みという絶対的要請）を見出ださねばならなかった場所、性的欲望は「自然的に、それ自体で」存在するものであると定義された。病理学的プロセスとして理解可能であり、従って、治療や正常化の介入を要求する領域ということだ。判読すべ

き意味の場である。特殊なメカニズムによって隠されたプロセスの場である。際限のない因果関係の結ばれる中心であり、狩り出すと同時に聴き取らねばならぬ不可解な言葉なのである。このような、これらの言説の「生産・配分の構造」、つまり、これらの言説に内在する固有の技術的知、これらの言説に必要な不可欠なもの、これらの言説が用いる策略、これらの言説の根底を貫き支えるものであり、かつそれらが運んでもいるところの権力——こういったものがこれらの言説の語ることの根本的性格を決定しているのであって、決して表象の体系がそれを決定しているのではない。性的欲望の歴史——すなわち、十九世紀に、特殊な真理の領域として機能したものの歴史——は、まず、言説の歴史という観点から書かれなければならないのだ。

この作業の全般に通ずる仮説を提案してみよう。十八世紀に発達した社会は——それを人が市民社会と呼ぼうが、資本主義社会と呼ぼうが、あるいはまた工業社会と呼ぼうが——性に対して、それを認知することを根本的に拒否する態度はとらなかつた。それは、反対に、性について真理の言説を産出するための大がかりな一つの装置を機能させたのである。ただ単にこの社会が性について多くを語り、また各人に性について語ることを強要したばかりではない。この社会は、性についての規則立った真理を言い表わそうと企てたのである。あたかもこの社会が、性のなかにこそ最も重要な秘密が隠されているのではないかと疑っていたかのように。あたかもこのような真理の産出を必要としていたかのように。あたかもこの社会にとつては、性が、単に快樂の生産・配分の構造のなかにではなく、知の秩序だった体制のなかに登録されることが最も重要であったかのように。こうして、性は、次第次第に、大きな疑惑の対象となっていた。我々の意志

に反して我々の行動と実存を貫いている、すべてに関わる、不気味な意味である。そこを介して悪の脅威が我々に訪れる弱点である。我々の一人一人が自己の裡に持っている夜の断片なのである。すべてに関わる意味、普遍的な秘密、遍在する原因、絶えることなき恐怖である。従って、この性についての「問い」問題（つまり性についての質問すること、性を問題として立てることとの二つの意味で——告白の要請と、合理性の場への統合であるが）においては、二つのプロセスが進展し、しかもそれが常に互いに送りかえされるのだ。我々は性に真理を語ることを求め（が、しかし、性がまさに秘密であり、それ自身からも逃れ去るものである以上、ついに照らし出された真理を、その真理のついに解読された真理を、我々自身で語る権利は取っておく）。そしてまた、我々は性に、我々に対して、我々についての真実＝真理を語ることを要求する、というかむしろ、我々は性に、我々が直接的意識において所有していると思っている我々自身についてのあの真実＝真理の底に更に深く埋もれた真理というものをこそ語れと要求するのである。我々は性に向かって、性の真理を、性がそれについて我々に語ったところを解読することによって語ってやる。性の方は性の方で我々に対して、我々についての真理を、それについて我々の手に捉えられないものを明らかにすることによって語ってくれるのだ。まさにこのゲームによって、数世紀この方、徐々に、主体についての知が形成されてきた。主体の形態についての知というよりはむしろ、主体を分割するものについての知だ。主体を決定するものに関する知でもあろうが、とりわけ、主体を主体そのものに対して捉えがたくしているものに関する知である。このことは予想外のことに見えるかも知れないが、キリスト教と裁判の領域における告白の長い歴史や、告

白という、西洋世界においてあれほど決定的に重要であったあの（権力である知）の形態が、どのように作用の場をずらされ、またそれ自体変形させられてきたかを考えるならば、ほとんど驚くには足りないことのはずだ。ますますその輪を狭めていく円環に沿って、主体の学の企てが、性の問題の周囲を回転し始めたのだ。主体における因果律、主体の無意識、それを知っている他者における主体の真理、彼^{〔主〕}自身が知らないことについての彼のなかにおける知、これらすべてが、性についての言説のなかに自らを繰り展げる手段を見出だしたのである。しかしながらそれは、性そのものの帰属する何らかの自然的特性というものによるのではなく、この言説に本来的に内在する権力の策略によってなのだ。

*

性愛の術に対立するものとしての性の科学、おそらくそうだろう。しかし、性愛の術が西洋文明から完全に姿を消してしまっただけではないということも、指摘しておかねばならない。同様に、それが、性的なるものについての科学を産出しようとする探求のなかに不在であったわけではない、ということもだ。キリスト教の告解のなかには、とりわけ、良心の教導と検証、ならびに靈的结合や神の愛の探究のなかには、性愛の術に類似した一連の方法があった。秘儀伝授の全過程を通じてなされる師による誘導、経験の集中・強化、そしてそのような経験の肉体的構成要素に至るまで、経験と並行して語られる言説によるその効果の増幅がそれである。反宗教改革期のカトリック教においてあれほど頻繁に見られた憑依や忘我・入神の現象は、おそらく、肉慾

に関するこの精緻にして微妙な学の本質的に内在する性愛的技術から溢れ出した、統御不可能な現象でもあったのであろう。そればかりではない、十九世紀以降は、この性の科学というものが——その清潔な実証主義の粧いのもので——少なくともそのいくつかの局面においては、性愛の術の一つとして機能しているのではないかと、問う必要がある。おそらく、この真理の産出過程は、科学的規範を前にどれほどおぼけづいていようと、自らに内在する快楽を増大させ、強化し、あまつさえ新しく創造もしたのである。人は屢々言う、我々は新しい快楽を發明する能力がないと。しかし少なくとも我々は別種の快楽を發明した。快楽の真理に基づく快楽であり、快楽の真理を知り、それを明るみに出し、発見する快楽、それを見ることによって自らを幻惑するという快楽、それを語り、この真理によって他の真理を捕え、虜にするという快楽、それを秘密のうち閉じ込め、それを策略を以て狩り出すという快楽である。快楽についての真実の言説というものに固有の快楽に他ならない。性的欲望に関する我らの知と密接に結びついた一つの性愛の術、その最も重要な要素は、健康な性的欲望という医学の約束する理念のなかにも、また、完全に開花した不満のない性的欲望という人間解放論的な夢想のなかにも、いわんや、性的絶頂感の謳歌や生命エネルギー論といったヒューマニズム的感情のなかにも、探し求めてはならないのだ（そこで問題になっているのは、そのような知の規準化的利用に他ならない）。そうではなくて、それを探し求めなければならないのは、性についての真理の産出に結ばれた快楽というものの増加と強化とにおいてである。書かれ読まれる学問的著作、診察と検査、質問に答える不安と自分自身が他人に解釈されていると感じる時の言いようのない快楽、自分自身と他人とに対して

なされたあれほど夥しい告白の物語、あれほど夥しい好奇心、真理に対する義務が、いささかは戦慄しながらも、屈辱の種を開陳していくあれほど数多くの内心の告白、聞く術を心得た人にあれほど高い金を支払ってささやく権利を手に入れる密かな幻想の氾濫、つまり一言で言えば、西洋世界が幾世紀も以前から巧みに醸成してきたこの途方もない「分析に基づく快楽」というもの（分析という語を最も広い意味にとつてであるが）、こういうすべてが、告白と性の科学とがひそやかに運んでいる一つの性愛の術の、さ迷える断片のようなものを構成している。いったい、我々の性の科学は、性愛の術の極めて特殊に微妙な一形態にすぎないのか。明らかに失われてしまったかに思われるこの伝統の、西洋世界型の純化された形式なのであるか。それとも、これらの快楽はすべて、性科学の副産物、その無数の努力を支えている利潤に他ならないと想定すべきなのであるか。

いずれにせよ、我々の社会が性に対して抑圧の権力を、しかも経済的理由で及ぼしているという仮説は、このようにざっと調べただけでも明らかに一連の補強や強化というものを考慮に入れねばならないとすれば、極めて狭苦しいものに見えてこよう。考慮に入れねばならぬのは、言説の、しかも権力の要請のなかに入念に組み込まれた言説の増殖である。多様な性的異形性の固定化と、それを孤立させるばかりではなく、それを呼び出し、惹き起こし、注意と言説と快楽の中心としてそれを成立させることが可能な装置の成立である。告白の執拗な産出、そこから正当な知の一つの体系と、多岐多様な快楽の生産・配分構造を創設する過程である。排除と拒絶の否定的メカニズムの点火であるよりは、遙かに、言説と知と快楽と権力からなる一つの複雑・微

妙な網の目に火を点け作動させることである。野性の無秩序な性を、何か暗く手の届かぬ地帯へと是が非でも排除し追いやるといふ運動ではなくて、反対に、そのような性を、事物と身体の表面へと分散させ、それを刺戟し、それを顕現し、それに語らせ、それを現実の世界に樹立し、それに真理を語れと命ずるプロセスなのだ。言説の多様性、権力の執拗さ、知が快楽とする戯れ、これらが、はつきりと目に見えるきらめきとして写し出す、性的なるものごとくがそれぞれある。

これらすべては幻想であろうか。性急にかき集めた印象にすぎず、その背後に、より注意深い目差しなら、抑圧という周知の巨大なからくりを再び見出だすことになるのであろうか。これらいくつもの燐光のきらめきの彼方に、常に否を言う暗い掟を再び見出ださなくてよいのであろうか。歴史の調査がそれに答えるであろうし、答えねばならないだろう。それは、すでに三世紀以前から、性に関する知が形成されてきたその仕方についての調査である。性に関する知を対象とした言説が増大したその仕方についてであり、そのような言説が産出するつもりでいる真理に、ほとんど信じられないほどの価値を我々が与えるに至ったその理由についてである。この歴史分析は、結局のところ、今述べたような最初の検証が予想させている事態を雲散霧消させてくれるかも知れぬ。しかし、出発点の前提として私ができる限り長く保有しておきたいと思うものは、権力と知との、真理と快楽とのこれらの装置、抑圧とはかくも異なるあれらの装置は、必ずしも二次的で、派生的なものではないということであり、また、抑圧はいずれにせよ根底をなすものでも、勝負に勝つものでもない、ということだ。従って問題は、これらの装置をまともに受け取

り、分析の方向を逆転させることなのだ。一般的に認められてる抑圧という事態や、また、我々が知っていると想定するものを基準に計られた無知から出発するのではなく、知を産出し、言説を増加させ、快楽を誘導し、権力を発生させるこれらの積極的なメカニズムから出発し、これらのメカニズムがどのような条件において出現し、機能するのかを追い、これらのメカニズムとの関係で、それと不可分の禁止や隠蔽の事実が如何に分配されるのかを探究しなければならぬ。一言で言えば、このような知への意志に本来的に内在する権力の戦略というものを定義すること。性的欲望という具体的なケースについて、知への意志の「経済学〔生産・配分・管理の学〕」を成立させることなのである。

(1) 訳注

ポール・ガルニエ(一八四八—一九〇五)はフランスの法医学者。パリ警視庁留置所長。パリ法医学研究所で司法精神病理学を講じる。『パリにおける狂気』(一八九〇)他、著書多数。Th・ブイエは性科学者で、男女両性における自慰の専門家。『女性における自慰の形態、原因、徴候、結果、処置に関する医学的、哲学的論考』(一八七六)、『精液漏』(一八七七)、『性的精神病』(第一巻「女性における自慰」、第二巻「男性における自慰」一八九七)。Ed・ラドゥセットもフランスの性科学者で、ヒステリー、自慰の専門家。『女性の病気』(一九〇五)、『ヒステリー論』(一九〇三)、『自慰論』、『同性愛論』(一九〇三)、『梅毒論』(一九〇四)等。モリス・ロリナ(一八四六—一九〇三)は、フランスの詩人。ポードレールの後継者と見なされたこともあり、『隠れ場』(一八八三)、『神経症』(一八八三)などで有名。

(2) 訳注

ジャン・シャルコ(一八二五—一九〇三)はフランスの病理解剖学、特に神経病理学の権威。サルペトリエール病院における一八七三年と八四年の公開臨床講義は、出版され、各国語に翻訳されて、シャルコの国際的名声を高めた。

(3) 原注

たとえば、ブルヌヴィル『サルペトリエール精神病院図録』一一〇ページ以下参照。この点に関して、サルペトリエール病院に現在も保管されているシャルコの授業についての未刊の資料は、出版された文書よりも一層明瞭に語っている。煽動と除去のゲームは、そこに極めて明瞭な形で読むことができ。手稿ノートの一つは、一八七七年十一月二十五日の回診の模様を伝えているものだ。当該患者はヒステリー性攣縮を示している。シャルコは、初め手を、ついで棒の先を、患者の卵巣の上に置くことで、その発作を中断させるのである。彼がその棒を取りのけると、発作が再発し、それを彼は、アミル硝酸塩の吸入によって助長させる。患者はその時、性器である棒をくれと要求するが、その言葉には、いかなる隠喩も含まれてはいない。「錯乱の続くGを退場させる」。

(4) 原注

ギリシャの法律がすでに拷問と自白とを、少なくとも奴隷に対しては、結びつけていた。帝政期のローマ法は、この実践を拡大した。これらの問題は、『真理の持つ権力』のなかで再び取り上げられるはずだ。

(5) 訳注

ヨアヒム・ハインリッヒ・カンペ(一七四八—一八一八)とクリスチアン・ゴットヒルフ・ザルツマン(一七四四—一八一二)は、共にドイツの教育学者。ハインリッヒ・カンペはロシア生まれの医師で『性的精神病学』(ラテン語文)を一八四四年に著わす。温泉療法の権威。クラフト・エービング(一八四〇—一九〇二)はドイツの精神病医。異常性慾者の記述と分類を企てた『性的精神病学』(一八八六)によって著名。サデイズム、マゾヒズム、同性愛、屍姦、快楽殺人、性慾亢進症、性慾欠乏症など、重要な類型をほとんど網羅したとされる。犯罪心理学、司法精神医学の創始者の一人。オーギュスト・タルディユー(一八一八—一八七九)はフランスの法医学者で『公衆衛生辞典』の著者。モレはアルバート・モルの誤りではないか。アルバート・モルは、ドイツの性科学者で、『生殖本能の倒錯』は一八九三年に仏訳があり、催眠術や『子供の性生活』(一九〇九)の著書がある。ハヴロック・エリス(一八五九—一九三九)はイギリスの医師、性科学の創始者。『性の心理学的研究』全六巻(一八九七—一九一〇)は性科学の百科辞典ともいべきもの。自体愛、ナルシシズム等の術語を作り、自慰の有害性を否定した。一九二六年に国際性科学会議を創立。